保険学会 九州部会　発表内容　レジメ

（2022 年 6 月 25 日）

PP1）始めに（タイトル）　「活版印刷技術が及ぼした中世海上保険証券への影響」

本日お話しします内容は付属資料３の「参考文献リスト」にも載せておりますが、昨年 12 月山縣記念財団の『海事交通研究』70 集に掲載され、既に公表されておりネットでの閲覧が可能な論文をベースにしております。

今回の報告で使用する一次史料の中には、著作権に関係するものもあり画像を学会 HP には掲載せず、当日会場のプロジェクターを通じて皆さんにご覧に頂きたいと考えております。

折角の機会ですので収集できたオリジナル史料の画像を、原色で楽しんで頂き中世の海上保険証券に触れ、先人の苦労を少し感じ取っていただければなと思っております。

PP２）「この文章は有名な部分の引用ですが見覚えがありますか？」

最下段でこの出典を紹介しております通り、恐らく多く研究者の方がお読みになられたことがある あの有名な木村栄一先生の「ロイズ保険証券生成史」の最初のページ部分です。ベンザ教授がダティーニ文庫で発見した「1384 年 7 月 11 日付の貨物海上保険証券を以て世界最古の海上保険証券だ」と宣言・主張されたことを紹介され、それよりも古い「1379 年の海上保険証券」が発見されベンザ教授の主張を訂正されたくだりです。

つまり現存する世界最古の海上保険証券は 1379 年のものだということが今日の定説となっています。

PP３）　ベンザ教授が 1385 年証券について書かれた文献.

ではこのベンザ教授が解説されている文献はどういったものかに興味を持ちました。論文の中でも少し触れました。

本のタイトルを翻訳すると「中世における保険契約の研究」という意味で、その表紙がこの画像です。幸い神戸大学図書館に所蔵する本ですが２ページ目を見ると「東京高等商業学校（一橋大学）図書館」という大きな「所蔵印」が押してある.

本文はもちろんイタリア語で書かれていますので、私と同様苦労される方もおられると思いますが、朗報です。実は本文献は全文が日本語訳されている書物があります。

・塙浩（1992）「ヨーロッパ商法史」です。このベンザ教授の本の全文が翻訳して掲載されています。この本の中には保険関係のシャウベやゴールドシュミットの文献についても

翻訳されておられます。

PP４）　ベンザ教授による 1385 年の海上保険の解説部分

こうした情報も抑え「1379 年最古の保険証券の一次史料」が保管されている、イタリアの「ダティーニ古文書館（財団)」の HP から史料請求を試みました。正式なオリジナル一次史料を入手には「申請書（もし提示できれば見せる)」が必要で、その最初部分に規約が書かれ「掲載する書籍や雑誌名、その雑誌の目的や組織、さらに発行部数」などを求められました。

PP５）　「ピサの保険証券（1379 年)」

手に入れた一次史料の画像がこれです。無料でした。
今回発表した論文でも一次史料の画像のうち、現地に行かずメールあるいは手紙で入手したものはこの「ダティーニ文庫」のケースを含め、「３パターン」があることに気付きました。

PP６）　「1379 年ピサの海上保険証券 2 ページ目（左側）とダティーニ古文書館　収蔵内部の史料棚（右側)」

この証券には計 3 ページあり２枚目がこの画像の左側です。古文書の中は右側の画像のようにきれいに整理整頓されています。数年前 TV「世界ふしぎ発見」の番組で、ヴェネチアの古文書館が映っていましたがやはりきれいに整頓されていました。

PP７）　ブルゴス現存最古の海上保険証券（1509 年 手書き）

小生の研究舞台の一つがスペイン北部「ブルゴス古文書館」ですが、1509 年作成の現地最古の海上保険証券でご覧の通り手書き」です。隣国スペインのここにポルトガル・「インド航路」の海上保険の史料も見つかり、博士論文の作成に弾みがついた大変有難い思い出深い古文書館です。
この証券 1 枚を作成するのに当時の書記官はどれだけの時間と手間がかかったのかなとつい思ってしまいました。

PP８）　「グーテンブルグの活版印刷の発明」

活版印刷技術を発明したドイツ人グーテンベルクです。この人物はなかなか波乱万丈の

人生を歩んでいますが、中世の３大発明（「羅針盤・火薬・活版印刷」）の一つといわれているこの活版印刷技術の発明は、この時代の「商業革命」につながる大いなる貢献を果たしたと思います。

この技術は海上保険証券にもこの機能が採用され、海上保険の発展と普及に大きな貢献を果たしています。

PP 9）　「スペインの海上保険証券（1570 年）：図 2」

「付属資料 1」で、1560 年ビルバオで制定された保険条例を紹介していますが、このブルゴスでも 1538 年保険条例がすでに制定されています。

この画像は 1570 年スペイン・ブルゴス（手書き証券と同じ場所）で契約され、ネーデルランド西部ミデルブルグ港で起きた海難事故（オランダ反乱軍が積荷を収奪）に関わる訴訟事件の一括書類の中に保存されていた海上保険証券（原本）である。

発見場所はヴァリャドリッド古文書館で当時この街は王国（レオン・カステーリャ王国）の首都で、この施設は高等司法裁判所でした。

PP１０）　「スペインの海上保険証券（1575 年）その 2 追加資料」

ブルゴスで発行された 1575 年の契約の画像である。

定型文の印刷部分と空白のスペースに個別項目を手書きで記入されている。
木村先生の本にも 1552 年のセヴィリアの活版印刷を利用した保険証券が掲載されている。
先ほど少し触れましたが、実はスペインでは 13-14 世紀のイタリア・ジェノヴァ・フィレンチェ、そして 15 世紀のヴェエチアに続き、1432 年バルセロナを最初に 1538 年ブルゴス（活版印刷を利用）、1556 年セヴィリア、1560 年ビルバオと順次保険条例が制定され、統一した保険証券の汎用様式がそこに掲載されている。

PP１１）　「スペイン有力商人サイモン・ルイス（ Simón Ruiz)」

この人物は、先ほどの 1575 年の海上保険証券に登場した「サイモン・ルイス（Simón Ruiz 1525-1597))」で、16 世紀の大航海時代 スペインの国際貿易で活躍したブルゴスの代表的な有力商人の一人である。彼はブルターニュ地方の織物をカスティーリャの「大市（おおいち　メディナ・デル・カンポ)」に合わせ取引する一方、現地特産の羊毛品の取引でも当時ヨーロッパ各地の主要都市(リスボン、ロンドン、バレンシア、ジェノヴァ、ルーアンなど）と行い、莫大な財を築いたユダヤ系の人物であります。

この時代になるとこの有力商人のように、国をまたいでの交易が行われ、取引規模が拡大化すると、組織も企業化して各地の国際商業都市に拠点を構え、本・支店間一体となった取

引を行っていた。その際活用していたのが最新の商業情報を提示した「商品価格表」や「為替相場表」であった。有力商人たちのこうしたツールを使いだした活動の変化は、当時のヨーロッパの国際商業の実態を知るうえで重要な部分である。

PP１２）　「アントワープとアムステルダムの商品価格表」

この画像が商品価格表である。1586 年アムステルダムで作成された初期のものである。商品価格表は当初は 1 年に数回の発行だったものが、やがて毎月へと最新情報のニーズが強まり、オランダの主要なビジネスセンターでは 1 週間に 1 回定期的に販売されるようになり、有力商人たちは本店・支店共にこれを保持し、現場で商業取引を行っていたといわれている。

PP１３）　「フランクフルトの商品価格表（1581 年）：図 3」
→付属資料１　この頃が海上保険証券も手書きから活版印刷に代わる過渡期であった

1450 年代ドイツ・マインツで実用化されたグーテンベルグの「活版印刷」の技術はその後ヨーロッパ各地に広がり、1473 年には最初の印刷本が刊行されている。中世後期には貿易により商品価格と為替通貨の変動が激化し、国際ビジネスに関わる商人は市場動向や為替の変化に敏感となり、いち早く最新情報を求めたがる商人たちの間に、この商品価格表や為替料率表 あるいは海上保険料率表のニーズが広まっていった。ここにこの活版印刷の技術が活用されていた。

これは 1581 年ドイツ･フランクフルトで発行された商品価格表 で現存最古のものです。事前に印刷された個別商品のフォームに、得られた最新の価格情報を手書きで書き加えられている。

PP１４）　「アムステルダム取引所の商品価格表 抜粋（1654 年）」

これはアムステルダムの商品価格表でフランクフルトのものより約 70 年遅れた 17 世紀半ばのものである。対象品目も 2 ページにわたり大幅に増加し、アムステルダム取引所で扱われた商品の大半がここに記載されている。

当時各国の商人たちは欧州最大の商業都市アムステルダムに集まり、それぞれ国別・民族別のコロニー（集合体）を形成し、他の主要都市に置いた営業拠点と緊密に連絡を取り合い最新の商業情報を交換していた。

この営業拠点間を行き来し流通する商品に付保する保険料率や、アムステルダムで取引される為替手形の相場の最新情報も、国際取引上重要でその為にこうしたツール類が発行されていた。

PP１５）　「アントワープとアムステルダムの為替手形の料率表」

二つの画像は商品価格表と同様に、商業都市の商人たちが入手したい情報が載る印刷技術を利用した為替相場表である。有力な商人たちは国をまたいでヨーロッパ各都市間の最新の為替の動きを見つつ、本社との連携をとり取引を行っていた様子がこうした商業ツールからも伺うことができる。

PP１６）　「ルカ・パチョーリの複式簿記の理論書「スムマ」」

この時代の有力商人たちが利用していた重要な商業ツールがもう一つある。それが複式簿記である。

この方式の会計簿方式は 14 世紀半ば北イタリアの商業都市で広がり、特に会社規模が大きくなると本支店双方に帳簿を備えておくことが不可欠になっていた。

これは世界最初に出版された複式簿記の「理論書」で、1494 年にイタリア商人出身の数学者ルカ・パチョーリ（1445 年ごろ - 1517 年）によって書かれた「スムマ（Summa)」と呼ばれる活版印刷を利用したこの「簿記論」の表紙である。その後各国語に翻訳され普及し、複式簿記の知識がヨーロッパ中に広まったといわれている。

PP１７）　「アムステルダムの保険証券（1592 年）：図 4」

本画像は 1592 年アムステルダムで作成された同国の現存最古の海上保険証券で、3 通ある証券の一つの保険証券の一部抜粋である。証券には海難事故が発生した際はアントワープとロンドンで行われている保険慣習に遵守（して処理される）する旨が記載されている。中央のやや黒い部分が定型文言の部分で活版印刷が利用されている。

PP１８）　「フィレンツェの海上保険証券（1602 年）：図 5」

冒頭紹介した 1379 年発行の手書きのピサの証券と比較　220 年経過するとこう変わる。この証券は 1602 年 8 月 6 日付フィレンチェで契約され「騎士団」のガレー船に積載された商品（絹の織物）に、海上保険が付保されている。実に整然と整理されている証券である。

この証券の入手はネットから Mansutti Foundation（マンスッチ財団）の HP に入り、そこからこの画像を入手したものである。この財団では海上保険などこうした画像を公開し、一定の規約を守れば制約なく閲覧できるシステムを取っているものと思われる。

PP１９）　「ハンブルグの海上保険の移入について」

ハンブルグの海上保険証券である。ハンブルグの海上保険のマーケットについて勝呂弘教授は「アントワープやアムステルダムなどヨーロッパ西部の交易都市における海上保険のノウハウが、ハンザ（同盟の）都市で有名な東部の街ハンブルグに移入された」と説明されている。また保険制度の知識はスペインやポルトガルで激しい宗教弾圧を受け離散したユダヤ系商人たちが持ち込んだものである。

海上保険を含め金融業についてグレゴリウス９世の「徴利禁止令」が出された後、表向きにはキリスト教徒が担うことが出来ず、宗教的な制約が薄いユダヤ教徒やイスラム教徒が主に担っていた。しかし大航海時代のメインの海上保険市場の一つであったスペイン・ポルトガルで受けた激しい宗教弾圧を避け、オランダやイングランドにそしてこのドイツ・ハンブルグに離散している。海上保険のノウハウが移入されていることは、この保険証券の言語がオランダ語であったことからも伺える。

PP２０）　「ハンブルグの海上保険証券（1628 年）：図 6」

ハンブルグ最初の海上保険契約は 1588 年のものだと研究者間でいわれているが、同保険証券は海難事故裁判の最中に原本が紛失し、残念ながら今日現存が確認されていないと木村教授も紹介されている。ただ直後の 1590 年付の契約証券は保存されているとの情報が木村教授の同書で取り上げられていたので古文書館に画像コピーを依頼したが、残念ながら同画像の原本は入手できなかった。ただ先の様式を受け継いでいる 1628 年の活版印刷を利用した本画像の証券が入手できたのでその経緯も含め次に披露したい。

なお原文はオランダ語で表示され、「万一の事故の際はアントワープ保険取引所 の様式と慣習に則る」旨が明記されていることからも、同地の海上保険がアントワープあるいはアムステルダムから強い影響を受けていたことは間違いない。

PP２１）「キーゼルバッハ教授の著書からハンブルグの初期海上保険証券の情報を入手」

この画像はハンブルグの初期海上保険証券を紹介したドイツ人キーゼルバッハ教授の著書の表紙である。同書は 1901 年発行の非常に古い貴重な本で、現在神戸大学を含め全国 16 大学の図書館に保管されている。この画像も写真印刷を利用しているらしくベンザ教授の本と同様あまり映りがよくない。下の方にかろうじて著者 G. Arnold Kiesselbach と Hamburug の文字が読み取れる。

PP２２）　「ハンブルグの 1628 年活版印刷による海上保険証券入手までの経緯」

同書の後半、最初に Anlage 2(付属資料 2)で 1590 年のものが出てくる（ここでは省略)。

次に Anlage 4 の 1628 年のものが掲載されており、この画像はこの Anlage 4 のものである。

同古文書館には使用目的を明示（学術研究で論文作成、投稿、研究会そして大学授業の資料に利用）しこの２例の史料を送って欲しい旨依頼した。約 1 週間たって先方からの回答は次のようであった。

① 今ドイツは丁度コロナ禍の感染が最悪状態にあり、同古文書館でも自宅待機の職員が大半である。依頼された該当の検索は必死に実施しているが見つからず、今後継続することは極めて困難な状況。

② 結局 1590 年の Anlage 2 の史料（1590 年の証券）入手をあきらめ、下記 Anlage 4 に的を絞って検索を依頼した。

③ 約 1 か月後に、前掲 1628 年の活版印刷を利用し同地で現存する最古の海上保険証券を入手した。

PP２４）　「史料入手の手数料の支払い」

先方から来た「請求書」はご覧の通りでご参考まで。因みに 1 枚入手するのに 15 ユーロ（2025 円）かかった。

史料の入手には「３通り」がある。つまり

① ネットで公開しており利用規定を遵守すれば、ほぼ自由に利用ができるもの

② 当該機関に事前申請を出し、規定の利用範囲を遵守する旨の確認が取れれば無料で提供してくれるもの

③ 当該機関に事前申請を出し、規定の利用範囲を遵守する旨の確認が取れたうえで必要な費用を支払うもの

である。ただし個別には個々の様々な事情があるので、各古文書館には十分に確認して入手することが重要である（小生は大学図書館司書の支援も仰いだ）。

PP２５）　「ポルトガルの海上保険証券（1770 年）：図 8」

リスボンに現存する最古の海上保険証券の史料は 1770 年とかなり遅い。これは 1755 年に起きたリスボン大震災の影響で、インド航路の関係の史料が保存されていた「インド商務院（Casa do Índia）」や保険取引に関与した商人たちが多く住む Rua Nova もテージョ川に近く、壊滅状態でそれまでの商業取引の史料はほぼ消失してしまったからである。これは地震後の契約の証券である。

PP２６）　「ロンドンの海上保険証券（1680 年）：図 7」

この画像は現在ロイズ図書館（Lloyd’s of London Original Archives）に収蔵されている

1680 年 1 月 20 日ロンドンで作成された『Golden Fleece 号』の船体および積荷に関する証券で、英国最古の活版印刷による海上保険証券の原本である。TMNF 現地駐在員の協力で Lloyd's から入手したものである。

今日世界の海上保険の中心といえば『ロンドン市場』と誰しもが認めるところであるが、このロンドンに近代海上保険が伝えられた時期がいつだったのか、実は正確には不明だといわれる。また他の商業都市に比べ活版印刷の利用した海上保険証券の登場が 17 世紀の後半とずいぶんと遅れていた原因は何か？　その明確な理由を小生はいまだに掴めていない。

PP２７）　日本に進出した海外の海上保険会社の証券（長崎）

グリコの「おまけ」みたい（失礼！）だが、近世の日本に進出してきた海外の保険会社の海上保険証券の雛形の一つである。

1916 年当時東京高商の講師であった村瀬春雄博士が「東京高商創立 40 周年記念講演」でお話しされ披露されたもので、明治維新前（つまり日本最初の保険会社である東京海上が設立（1879 年）される以前に外国保険会社の日本に進出していたこと紹介している。

この資料の文献は Victor von John (1874) Die See-Versicherungs-Policen だが、1874 年発行のドイツ語で書かれ、日本では現在京都大学法学部図書館に唯一保存されているようだ。幸いなことにネットでも検索が可能でぜひ画像をご覧ください。

PP２８）　**「まとめ」**

今回海上保険証券の変遷を証券面に焦点をあて、活版印刷技術の影響や効果をみてきた。海上保険証券の変化から、拡大し国際化する当時の商業取引にも大きく影響を与えていたのは事実であった。大型化する物流の移動変化は、そのビジネスに関わる多くの商人たちに厳しい取引が求められ、拠点展開や企業化といった組織にも変化を齎している。

日常の商業取引の場では最新の情報を得てより有利な商業活動が必須条件となり、その当時の商人間で最新の情報を欲しがる機運と相まって、活版印刷の技術を利用した「商品価格表」や「為替相場表」も市場に多く登場した。

海上保険分野においても、ビジネスの大型化・国際化・多様化によってより迅速かつ簡素化の事務手続きが求められ、この活版印刷の技術が導入されるようなっていった。
やがて保険ビジネスは制度面で様々な改革が行われ、近代的な保険へと変化・発展していく一つの足掛かりとなっていった。

以上